

オルガノン要約 § 67～§ 70

§ 67 § 66 からホメオパシーによる有益な治癒の経過が明らかになる一方、アンティパシーが本末転倒であることも明白である。

(注) 救急医療の意義：

アンティパシーは極めて急を要するときだけに有効である。救急的に死が迫っているときはレメディーの反応を待つことはできない。緩和剤や解毒剤などを用いて、いったん蘇生させなければならない。蘇生したら生きている器官は健康な経過をたどり始める。生命エネルギーは健康であり、その活動を阻害も抑圧もされていないからである。

§ 68 レメディーは非常に微量であるので、治療後にレメディーの影響が残っていてもすぐに消える。生命エネルギーは病的な攪乱が消滅した後はあまり努力する必要がない。

§ 69 薬による反対の症状によって病気を根絶しようとするが、それは不可能で、わずかな期間だけその症状を根源的生命に気づかれないようにするだけである。その後薬の症状と逆の状態を強制的に生じさせる。これは根絶されずに残った自然の病気による攪乱状態ともいえ、必然的に激しくなり大きくなる。

薬による反対の症状は、病気によって攪乱された身体の場所を占拠することができない。つまり緩和剤はその作用が終息した後にはいっそう症状が悪化し、投与量が多くなるほどますます悪化する。

(注 1) 感覚器官や印象に持続的な「相殺」は起こらない。

(注 2) 二次作用を起こすのは薬ではなく、常に生命エネルギーが生み出すものである。

§ 70 ここまで (§ 1～§ 70) のまとめ

- ・ 治癒すべきもの：患者の状態の変化の総体においてのみ存在する。
- ・ 薬の治癒力の本分は、病気の症状をその元から刺激すること。
- ・ 薬の治癒力はプルービングによって知ることができる。
- ・ 薬の症状と類似していない病気を治癒することは決してできない（アロパシー）。
- ・ 反対の症状を生み出す薬（アンティパシー）で緩和できるのは一次的であり、慢性的な重い病気を治癒することには全く適さない。
- ・ ホメオパシー：症状の総体に対してできる限り類似した症状を生み出すことができる薬を適量使用する。生命エネルギーへの類似した攪乱によって症状は必ず永遠に消滅する。